

独自性欲求尺度による色彩嗜好傾向の分類

—身につける色と周辺に置く色に着目して—

Characterize Color Preference using of the Need for Uniqueness Scale

—Emphasis on 'something to wear' and 'environment'—

三浦久美子 Kumiko Miura

早稲田大学大学院人間科学研究科

Graduate School of Human Sciences, Waseda Univ.

齋藤 美穂 Miho Saito

早稲田大学人間科学部

School of Human Sciences, Waseda Univ.

キーワード: 独自性欲求, 色彩嗜好, 身につける色, 周辺に置く色

key words: need for uniqueness, color preference, color as something to wear, color as environment.

1. 序

Maslow, A.H. (1954) ¹⁾によると, 人間の欲求は大別して5つの階層に分けられ, 最も高次なものが自己実現の欲求とされている. 更に Snyder & Fromkin は, その中の一つとして“独自性欲求”(個性への欲求)があることを指摘し, Need for Uniqueness Scale を作成した(1977) ²⁾. それを邦訳した岡本(1985) ³⁾は, 独自性欲求と好きなものとの関連を検討し, プロ野球チームや外国の観光地等いくつかのカテゴリ間で正相関が認められたことを報告している. そこで今回は色彩嗜好との相関を検討した. 尚, 具体的事象として, ‘身につける色’及び‘周辺に置く色’に着目した.

2. 目的

独自性欲求の高低は‘身につける色’及び‘周辺に置く色’の嗜好に影響するかどうかを検討すること.

3. 方法

3.1. 刺激

マイクロソフト社 Word で作成した, ニュートラルグレーの背景に配置された75色で構成される<カラーチャート>を用いた. 各色の配置及びマンセル記号の測色結果と色名を Table1 に示す.

3.2. 対象者

主に東京在住の大学生, 大学院生, 会社員 335名(男性136名, 女性199名). 平均年齢19.7才(SD=2.41).

Table1. 刺激色のマンセル記号と色名

10.0R 8.0/2.0 pale pink 01	6.0YR 8.0/2.0 pale beige 02	5.0Y 8.5/3.0 pale yellow 03	3.5GY 8.0/4.5 pale yellow green 04	1.0G 8.0/2.0 pale green 05	10.0B 8.0/2.5 pale greenish sky 06	5.0PB 7.5/2.0 pale sky 07	10.0PB 7.5/2.0 pale lavender 08	6.0P 7.5/2.0 pale purple 09	2.5R 8.0/2.0 pale purplish pink 10
2.0YR 7.0/1.5 grayish pink (lt2) 11	7.5YR 6.5/2.0 beige 12	5.0Y 7.0/3.5 grayish yellow 13	2.5GY 7.0/3.5 grayish yellow green 14	2.0G 6.5/1.5 light grayish green (lt12) 15	3.5B 6.0/2.0 grayish sky (lt16) 16	6.0PB 6.5/1.5 grayish lavender (lt18) 17	9.0PB 6.5/2.5 grayish lavender 18	6.5P 6.5/2.0 light grayish purple 19	8.0R 7.0/1.5 grayish pink (lt24) 20
10.0R 6.0/4.5 dull red 21	3.0YR 6.0/4.5 yellowish brown 22	5.0Y 7.0/6.0 dull yellow 23	3.0GY 7.0/6.5 dull yellow green 24	1.5G 6.0/2.5 dull green 25	5.0B 5.5/4.0 dull greenish blue 26	4.0PB 5.5/4.0 dull blue 27	4.0P 5.5/3.5 dull violet 28	10.0P 5.0/4.0 dull purple 29	4.0R 5.0/6.0 dull red purple 30
9.5R 6.0/7.0 pink 31	4.5YR 7.0/6.0 light orange 32	6.5Y 8.0/7.0 light yellow 33	4.5GY 7.5/8.0 light yellow green 34	3.0G 6.5/4.5 light green 35	6.0B 6.5/5.5 light greenish blue 36	4.5PB 6.5/5.5 sky 37	4.5PB 6.5/5.5 lavender 38	6.0P 6.0/5.0 light purple 39	10.0RP 6.5/6.5 purplish pink 40
4.0R 4.5/11.5 vivid red 41	1.5YR 5.5/11.0 vivid orange 42	6.5Y 8.5/11.5 vivid yellow 43	7.0GY 6.5/12.0 vivid yellow green 44	1.5G 6.0/11.5 vivid green 45	3.0B 5.0/11.5 vivid greenish blue 46	5.5PB 4.5/11.0 vivid blue 47	9.5PB 4.0/11.0 vivid violet 48	3.5P 4.0/11.0 vivid purple 49	9.5RP 4.5/11.5 vivid red purple 50
7.5R 4.5/9.0 deep red 51	1.5YR 5.0/6.5 brownish gold 52	3.0Y 6.0/7.5 deep yellow 53	8.0GY 5.5/7.0 deep yellow green 54	1.5G 4.5/4.5 deep green 55	2.0B 4.0/4.5 deep greenish blue 56	5.5PB 3.5/7.0 deep blue 57	9.0PB 3.0/7.5 deep violet 58	8.0P 3.5/7.0 deep purple 59	3.5RP 4.5/9.5 deep red purple 60
9.0R 4.0/5.0 dark red 61	3.5YR 4.0/4.0 dark yellowish brown 62	7.5Y 5.0/4.5 olive 63	5.5GY 4.5/4.0 dark yellow green 64	1.0G 3.5/2.5 dark green 65	1.5B 3.0/1.5 dark greenish blue 66	6.5PB 3.0/2.0 dark blue 67	3.0P 3.0/3.0 dark violet 68	9.0P 3.0/3.5 dark purple 69	9.5RP 4.0/6.0 dark red 70
n 9.5 white 71	n 7.5 light gray 72	n 5.5 medium gray 73	n 3.5 dark gray 74	n 1.5 black 75					

3.3. 手続き

各対象者に32項目5件法から成る邦訳版の独自性欲求尺度(岡本, 1985) ³⁾に対する回答を求めた. また, カラーチャートを呈示し, 選択法により, 身につけたい色, 周辺に欲しい色, 及び身につけたくない色, 周辺に欲しくない色のそれぞれを3色ずつ選択すると同時に選択理由の回答も求めた. 蛍光灯による照明の室内で2003年7月~10月に実施した.

4. 結果

4.1. 独自性欲求スコア結果

本調査における対象者の総スコアは, 52~139点であった. 独自性欲求尺度の全項目に「どちらでもない」と回答した場合, スコアは96点となる. 従って, その前後も含め総スコアが90点台の対象者を除き, 総スコア100点以上を高独自性欲求群(122名), 80点以下を低独自性欲求群(121名)とした.

4.2. 総合的嗜好順位結果

Table2は‘身につける色’及び‘周辺に置く色’の両カテゴリにおける嗜好色と嫌悪色のそれぞれにおいて選択された上位5色を示したものである. 色名は略号を用い, 括弧内は色番号を示す.

‘身につけたい色’において, 高独自性欲求群では white が, 低独自性欲求群では black が1位であった. light greenish blue, pale greenish sky, pale pink は共通して選択されたが vivid yellow は高独自性欲求群にのみ好まれた. ‘周辺に欲しい色’は, 多少の順位差はあるが, white, light greenish blue, pale greenish sky, vivid yellow が共通して選択された.

Table2. 総合的嗜好順位

	身につけたい色		周辺に欲しい色		身につけたくない色		周辺に欲しくない色	
	高独自性欲求群	低独自性欲求群	高独自性欲求群	低独自性欲求群	高独自性欲求群	低独自性欲求群	高独自性欲求群	低独自性欲求群
1st	W(71)-12.6%	Bk(75)-11.8%	W(71)-15.2%	W(71)-10.2%	dk gB(66)-7.2%	dk Y(63)-6.4%	v RP(50)-7.2%	dk gB(66)-10.5%
2nd	Bk(75)-10.2%	W(71)-9.9%	lt gB(36)-6.8%	pl gB(6)-7.1%	v Y(43)-5.6%	dk gB(66)-5.9%	dk gB(66)-6.1%	dk Y(63)-7.3%
3rd	lt gB(36)-6.3%	pl R(2)-6.3%	v Y(43)-5.8%	v Y(43)-6.8%	dp P(59)-4.2%	v RP(50)-5.0%	dk PB(68)-6.1%	dk PB(68)-7.0%
4th	pl R(1)-6.3%	lt gB(36)-7.4%	pl gB(6)-5.5%	lt gB(36)-5.7%	v R(41)-3.9%	v R(41)-5.0%	dk Y(63)-5.8%	dk P(69)-4.9%
5th	v Y(43)-3.8%	pl gB(6)-4.7%	lt B(37)-4.5%	pl R(2)-5.7%	v RP(50)-3.9%	dk RP(70)-4.2%	v Y(43)-4.7%	v RP(50)-4.7%
合計	43.1%	41.9%	37.8%	35.5%	28.7%	30.7%	30.1%	34.3%

‘身につけたくない色’は、両群に共通して dark トンの色相 B や Y, RP, deep purple や vivid red が嫌悪された。差異は、高独自性欲求群に vivid yellow が、低独自性欲求群に olive (dark yellow) が選択された点であった。‘周辺に欲しくない色’においても、両群に共通して dark トンの Y, g B, P B や vivid トンの Y, R P が選択された。高独自性欲求群では、vivid yellow は両カテゴリ共に好悪の拮抗する傾向が得られた。

4.3. 色相別・トーン別結果

Fig.1~Fig.4 は両カテゴリにおける両群の選択傾向(嗜好色のみ)を色相別・トーン別に示したものである。両群を比較してみると、‘身につけたい色’としては高独自性欲求群の方が色相 R や white, dull トンを多く選び、低独自性欲求群は YR, g B, RP, black, pale トンをより好む傾向にあった。‘周辺に欲しい色’としては、高独自性欲求群は neutral (主に white), light-grayish トンを、低独自性欲求群は色相 R, YR, pale トンをより多く選択した。



4.4. χ^2 検定結果

Table3. χ^2 検定結果

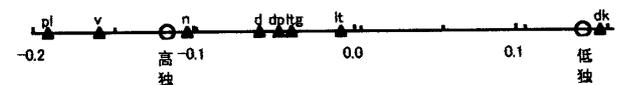
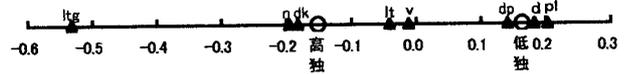
身につけたい色	色相	-
		トーン
周辺に欲しい色	色相	-
		トーン
身につけたくない色	色相	-
		トーン
周辺に欲しくない色	色相	-
		トーン

* p<.10, *** p<.0001

独自性欲求が色彩嗜好に与える影響を明確に、またそれが有意であるか否かを検討する為、各カテゴリにおける両群の選択度数に対して χ^2 検定を施し、結果を Table3 に示した。‘周辺に置く色’のトーンにおける嗜好の有意差が認められた。

4.5. 双対尺度法による分析結果

有意差の認められた両群の‘周辺に置く色’の嗜好パターンをより明確にする為、双対尺度法による分析を試みた。解で重み付けられたベクトル値を基に相関比の最も大きい解を直線上に示したものが Fig.5, Fig.6 である。以上の結果と総合的に判断すると、‘周辺に置く色’として、高独自性欲求群は dark トン, neutral, light-grayish トンを好むが vivid トンや pale トンを嫌悪し、逆に低独自性欲求群は pale トン, dull トンを好むが、dark トンは嫌う傾向にあると結論付けられよう。



5. 考察及び結論

['身につける色'に関して]

‘身につける色’の嗜好に対する独自性欲求の有意な影響は、色相・トーン共に認められず、齋藤らの研究(1991) 5) によって報告された日本人の一般的色彩嗜好傾向とほぼ一致した結果が得られた。齋藤らは、10代、20代は他の年代より black を好む傾向が強いことも報告しており、本調査において両群共に black が人気であった原因が見出せる。しかし、black の嗜好理由は非常に様々で、高独自性欲求群には“格好良い”“理想のイメージになれる”といった理由が多く見られたのに対し、低独自性欲求群には“無難”“汚れが目立たない”といった保守的な理由も多く観察された。このように、同じ色でも異なる選択理由によって嗜好されることは他の色にも少なからず当てはまると思われ、時として独自性欲求を端的に表わすと考えられよう。そして、‘身につける色’の嗜好に関して、独自性欲求の影響をより深く追求する為、各群における嗜好理由の解析の必要性を示唆する結果となった。

['周辺に置く色'に関して]

‘周辺に置く色’は、トーンの嗜好に対する独自性欲求の影響が確認された。日本と周辺アジア地域との色彩嗜好を比較しても日本では pale トン, vivid トンが好まれ、dark トンや dull トンは嫌悪される傾向にある (Saito, 1996) 2)。それに反して高独自性欲求群は dark トンを好み、vivid トンや pale トンを嫌う傾向が観察された。原因として、性差の影響が否めない。日本人の独自性欲求は男性の方が高いことが岡本 (1988) 4) によって報告されている。更に、本調査において色彩嗜好の性差が確認され、一般に嫌悪される dark トンは男性に好まれる傾向にあった。しかし、このような性差の要因を差し引いても、高独自性欲求群のトーンの嗜好が一般と異なったことから、‘周辺に置く色’のトーンの嗜好と独自性欲求との相関を肯定する結論が導き出せよう。

参考文献

- Maslow, A. 1954. *Motivation and Achievement*. Harper and Row.
- M. Saito. "Comparative study of color preferences in Japan and other Asian regions, with emphasis on the preference for white." *Color Research and Application*, 21, 1996, 35-49.
- 岡本浩一. 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究. *心理学研究*, 56, 1985, 160-166.
- 岡本浩一. 独自性欲求の男女差に関する基礎的研究. *社会心理学研究*, 3, 1988, 56-62.
- 齋藤美徳・富田正利・向後千春. 日本の四都市における色彩嗜好 (I) - 因子分析的研究 -. *日本色彩学会誌*, 15, No. 1, 1991, 1-12.
- Snyder, C.R., & Fromkin, H.L. Abnormality as a positive characteristic: The development and validation of a scale measuring need for uniqueness. *Journal of Abnormal Psychology*, 86, 1977, 518-527.